令和７年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立与野西中学校 ）　　学校番号　２４６　　【様式】

学校教育目標	「心豊かな生徒」「自ら学ぶ生徒」「自己実現を目指す生徒」
目指す学校像	○希望の登校　○笑顔の活動　○満足の下校

重点目標	1　学力の定着・向上を目指した授業の工夫・改善 2　信頼関係に立った生徒指導の充実と、きめ細やかな指導をとおした心豊かな生徒の育成 3　安全・安心で心潤う教育環境づくり 4　保護者や地域等との連携協力の推進

※重点目標は５つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

学校自己評価								学校運営協議会による評価
年度目標					年度評価			実施日令和８年２月１９日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	**『学びの質の向上に関する取組』** 〈現状〉 ○全国学力・学習状況調査や市の学習状況調査では、国語、数学ともに全国、市平均と比べ概ね良好な結果である。 ○日々の授業で、タブレットを活用し課題解決のための調べ学習や、調べたことの整理やまとめ、プレゼンテーションを行うことに意欲的に取り組む生徒が多い。 〈課題〉 ○授業日数が来年度、205 日から 202 日になるため、自学自習の充実がさらに求められる。本校では、家庭学習の習慣が十分に身に付いていない生徒や先を見通した計画的な学習を苦手とする生徒が多い。 ○教員間にタブレット活用の程度の差があるので、教科の特性を生かしたタブレットの有効活用について、研究・実践する必要がある。	・生徒同士の学び合い、教え合いの時間の確保 ・生徒がわくわくする授業の提供 ・学びの自律化や個別最適化、教員の授業改善に向けた情報端末の活用	・集団での学びの充実のため、タブレットを昨年以上に有効に活用し、授業の学びの風景を変える。学校では、集団での学びに特化し、個で出来ることは、自習時間や家庭学習で行う。 ①集団で学ぶことの意義を教職員や生徒に自覚させ、授業中は教え合い、学び合いの時間を多くとる。自由進度学習を２教科で行う。 ②授業において、Teams 内のパワーポイントに、個人の考えや班での話合いで練った意見を全員のタブレットに送り、共通理解を図る。授業のまとめでは、ミライシードを使い、個人の考えやわかったことを教員に送信するとともに、小単元ごとの理解度を Forms に入力し、学びの足跡にする。 ③家庭学習の充実や学びの自律を図るために、各クラスの Teams 内に、クラスのページを作成し、今日学習したことに関する授業で使用したパワーポイントの掲載、関連するスタディーサプリの動画や関連問題の掲載を行う。 ④クラス Teams には、生徒が明日の教科連絡やクラスメイトへの呼びかけ、教員からの宿題（例、予習資料を読む。課題に対する予想をたてる等）を掲載し、個別最適化の学びを充実させる。 ⑤数学の「数学的な見方や考え方」についての習得・探求はもちろん、全教科において学力向上を目指すため、反復学習はもちろん、思考の深まる授業内容の精選を行う。	○学校評価生徒アンケート「授業規律と落ち着いた授業」「授業のわかりやすさ」の各項目について肯定的な回答が、「授業規律」が 84%、「授業のわかりやすさ」が 94%以上、昨年度を上回る。 ○学力調査の分析結果について校内研修等で、授業改善や具体的手立てを明確にし、授業実践する。	○生徒アンケート「授業がわかりやすい」の項目に対し、97.5%が肯定的な回答で A 評価は 53%であった。授業のわかりやすさと主体的な学びを確保するために、ICT をやみくもに使うのではなく、教員各々が教科の特性に応じた最大の効果が上がるタブレット活用の理解が深まり、精査された効果的な活用できていると考える。①Teams 内のパワーポイントに、個人の考えや班での話合いで練った意見を全員のタブレットに送り、共通理解を図った。②授業のまとめでは、ミライシードを使い、個人の考えやわかったことを教員に送信し、学びの足跡にした。③個でできることは、家庭学習や自習時間に、集団の学びは授業で、という考えのもと、授業の説明部分を事前にビデオにとり、家庭で見てきた上で、授業では議論から始まることも行った。 ○生徒アンケートの「授業規律」では、85.4%が授業の約束を守り落ち着いて取り組んでいると回答した。 ○昨年度の全国学力・学習状況調査の結果分析から、特に数学では、図形や数式を解く際に、多角的なものの見方を養い、自分の考えを表現できる力の育成に取り組むなど、全教科で国語力・表現力向上のため、根拠を明確にしたうえで自分の言葉で説明できる力の育成を図った。	A	○今年度に引き続き、集団で学ぶ意義を全教職員で意識し合い、学校では限られた授業時間を、話合いや議論を中心とした授業構成にしていく。そして、今年度以上に、個でできる、説明を聞くことや予想を立てること、問題演習を家庭学習に位置付ける。さらに多くの教員が、授業で使用したパワーポイントやスタディーサプリの動画・関連問題の掲載を行えるようにしていき、個別最適化の学びを充実させる。タブレットのよさを生かし、効果的に学習できる環境をつくっていく。	個別最適な学びの実現に向け、習熟度別課題の提示や ICT を活用した個別課題配信が進められている。 授業において「めあて」と「振り返り」が定着しつつあり、生徒が学習の見通しをもって主体的に取り組む姿が見られる。 少人数指導やティームティーチングの工夫により、基礎学力の定着に一定の成果が見られる。
2	**『心のサポート・心の安心に関する取組』** 〈現状〉 ○全国学力・学習状況調査において、「学校に行くのが楽しい」の質問に肯定的な回答をした生徒の割合は、全国、市平均を上回っている。 ○心に不安を抱えている生徒が多くみられ、個々に応じたケアが必要である。 〈課題〉 ○思春期特有の不安や不透明感からくるストレス等、生徒が抱える悩みが尽きないことから、今後も、生徒一人ひとりの状況を的確に把握し、適切なタイミングで組織的に支援・相談していくことが必要である。 ○特に、信頼他者の低い生徒の割合がやや多い。 ○インターネット（SNS 等）による誹謗中傷、事実無根の書き込み等、生徒の安心が脅かされている。	・全ての生徒が生き生きと表情を送れ、学校生活を送れるよう、細やかな教育支援相談に向けた校内体制の充実	・誰もが３年間元気に通える心に安心感のある学校、不登校生徒を増やさないためのわくわくする学校をつくる。授業や行事等、あらゆる場面で生徒の活躍の場を設定し、できたことを大いに褒めたたえ、生徒の自己指導能力の育成を第一に考える、 ①全教員の人事評価シートに生徒の信頼自己や信頼他者を高めるための方策を記入させ、具体策をもって日々の学年・学級経営に当たらせる。特に、行事等を効果的に活用し、クラスの一体感を創出するなど、信頼他者を高める取組を重視する。 ②おはようメーター等のスクールダッシュボードのさらなる充実を図り、タブレット端末を活用して生徒指導や教育相談部会、生徒との面談等の記録を蓄積し、生徒一人ひとりの状況を継続的に把握する。 ③通級指導教室の活用生徒を増やし学習や生活面で生徒の困り感を解消する。 ④Sola ルームでの学習保障とソーシャルスキルトレーニングを行うことで、教室に入れない生徒に学習と心の教育を施す。各クラスの Teams には、生徒が明日の教科連絡や級友への呼びかけ等も行っていき、心を通わせるツールにしていく。	○１月の心と生活のアンケートにおいて、全校生徒の信頼自己が高い生徒（ABC判定）の割合を 95%以上とする。（4 月調査は 93.5%）同様に信頼他者が高い生徒（ABC判定）の割合を 83%以上とする。（4 月調査は 80.5%） ○学校自己評価に係る生徒アンケート「穏やかな雰囲気（心）で学校生活が送れている」の肯定的な回答の割合が 88%（昨年 87.5%）以上にとなるようにする。	○1 月の心と生活のアンケートにおいて、全校生徒の信頼自己が高い生徒（ABC判定）の割合は 95.1%であった。（4 月調査は 93.5%）同様に信頼他者が高い生徒（ABC判定）の割合は 80.8%であった。（4 月調査は 80.5%）4 月と比較して、どちらも微増ながら高い生徒の割合が上がっている。その理由として今年度は特に、この２つを重点項目とし、全教職員で意識して具体策を人事評価シートに記入させ実施できたことが挙げられる。誕生日を全員で祝う、良いことカードの交換、行事でのお互いフォローし合えるシステムづくり等、具体策をもって日々の学年・学級経営に当たらせたことで、不登校生徒を生まないクラスや作りを組織的に行うことができた。 ○以上の取組より、生徒アンケート「穏やかな雰囲気（心）で学校生活が送れている」の肯定的な回答の割合が 89.3%（昨年 87.5%）以上にとなっている。 ○特に今年度は、教室に入りずらいと感じる１４名の生徒に対して、Sola ルームでの学習保障と相談室でのソーシャルスキルトレーニング（心の教育）をバランスよく行うことができた。	B	○今年度以上に、全教職員で学習や生活面で困り感のある生徒を見つけ、校内就学支援委員会を経て、通級指導教室につなげていくことで、困り感の解消に向けてのスキルアップを図り、生徒指導上のトラブルを減らしていく。 ○Sola ルームの果たす役割が、来年度もさらに重要になってくると考えられるので、活用の際には、校長・担任・本人・保護者の四者面談を行い、Sola ルームでの過ごし方や学習内容を自己決定させてから取り組ませることを徹底する。今年度は、その結果、意識が高まり全員が真剣に学習に励んでいる。教科によってや給食だけ行けるなど、教室に行く際の自信となっていた。充実を図るために、ボランティア支援員の活用や、担当教員の時間割への組み込み、個別学習ノートの作成等を行った ○さらなる個々の生徒理解を深めるため、朝のおはようメーター、授業の取り組み具合や達成満足度など、スクールダッシュボードのデータ収集を行い、ライフログ、生徒指導上のデータを一元化していく。	不登校傾向にある生徒に対し、学習室を活用した個別支援体制の整備が進められている。安心して過ごせる居場所づくりを基盤に、段階的な教室復帰やオンライン学習支援など、多様な学びの保障に努めている点は評価できる。 また、スクールカウンセラーや関係機関との連携を図り、心の安全を第一とした支援体制が構築されつつある。
3	**『開かれた学校に関する取組』** 〈現状〉 ○昨年度も、学校運営協議会での話し合いの内容を確実に実行し、地域や家庭と一体となった数々の取組を行うことができた。地域の方々の本校への愛情の深さを常日頃から感じている。学校運営協議会では、常に、自ら課題を見出し、協働して解決し、さらに生徒を地域全体で育てていくことを確認している。 〈課題〉 ○今年度も、昨年度の実践を生かし、さらに多くの地域の方々のプロジェクト参加を促していきたい。より一層、学校・家庭・地域が一体となった実践を熟議によって決定・実行していく。望ましい生徒の姿や学校に期待することを、家庭・地域・企業などに広め、地域に住み、地域に集う全ての人々と共有できるようにする。	・地域ぐるみで子どもを育てるための具体策の発案と実践 ・生徒自ら地域や社会に貢献できることを考え、実践する力の育成	・コミュニティ・スクールを更に進め、地域に根差し、地域とともに成長する学校にしていくため、昨年度までの取組を一層充実させる。 ①地域とのかかわりをさらに深めるため、地域の自治会やコミュニティーの要請に応じた、中学生ボランティアを組織的に制度化し、今年度以上に、中学生が幅広くボランティアで汗を流せるようにする。 ②自治会長会や民生委員・主任児童委員等との会合を開催し、情報交換や役割分担を行う。③校内に設置した「学校・地域交流センター の有効活用のための規約を策定し、必要とする地域の団体に幅広く門戸を開放する。 ③災害ゼロの町づくりに向けて、生徒が昨年以上に積極的に地域に目を向ける活動を行う。A 中学校区安全デジタルマップの見直しと、年２回安全マップティッシュを生徒が与野本町駅前で地域の方に配布　地域全体での防災意識を啓発　B 夏祭りの中学生神輿　C 地域の清掃活動　D 地域の避難場所運営訓練においての生徒参加　E 地域防災・安全の視点に立った未来くるワーク体験 ④学校施設を地域の方々が活用できるよう検討の開始。（昼間のテニスコート利用） ⑤部活動の地域移行化の１歩として A 地域から指導者の招聘、B 中学生のスポーツ活動の多様化の推進（本校を基盤に中央区の４校から募集する女子サッカーチームをつくる。）バスケットボール部でプロ選手の指導を乞う。 ⑥学校行事や講演会について、学校に関わる人々がオンラインで参観できるように整備を行い、家庭や地域に学校を公開する。 ⑦学校 HP に、与野西中レポートとして、校長として知らせたいこと、感じたこと、生徒の頑張っている様子を発信する。	○保護者アンケート「保護者や地域の協力による教育活動の推進」の項目に対し、肯定的意見が 84%の肯定的な回答、A 評価 24%以上になる。（昨年度 83%、A 評価 23%）以上となる。 ○教職員アンケートで、「地域の方々と接する機会を多く持ち活動ができたか」の項目に対し、肯定的意見が ９８%以上、A 評価 24%以上になる。（昨年９８%、A 評価 26%）	○保護者アンケート「保護者や地域の協力による教育活動の推進」の項目に対し、肯定的意見が 86%、A 評価が 31%になった。また、教職員アンケートで、「地域の方々と接する機会を多く持ち活動ができたか」の項目に対し、肯定的意見が 99%、A 評価が 29%）となり、昨年以上に学校教育に保護者や地域のかかわりが密になっていることが伺える。 ○今年度、中学生の地域ボランティア充実を大きなテーマの一つに掲げ、自治会長会を初めて開催し、中学生ボランティアのニーズの収集や募集、実践までの仕組みを学校地域連携コーディネーターと共に構築できた。現在までに、駅での赤い羽根募金や神社清掃、自治会運動会など、16 の募集に、98 名の生徒が応募し活動できた。生徒には、朝会で感謝状の贈呈、活動報告を行い、皆で頑張りを称え、「次は自分もやってみよう」との意欲を駆り立てている。夏祭り中学生神輿では生徒が 100 名以上参加し、地域の大人が支えてくれた。 ○災害に強い街づくりをテーマに、総合的な学習の時間で、地域防災・安全の視点に立った未来くるワーク体験や中学校区安全デジタルマップを作成した。	A	○今年度、安全教育のまとめとして安全マップティッシュを生徒が与野本町駅前で地域の方に配布した。来年度も継続し、地域全体での防災意識の啓発に努める。 ○今年度、部活動の地域移行化では、与野女子サッカーチームの創設、希望者テニスチーム活動の充実、野球の合同チームのよさを生かし県大会出場を果たす等、できることから取り組んだ。来年度も地域移行を模索する。 ○昨年度末に校舎内に設置した、地域連携ルームを周知し、充実した活用を図り、徐々に地域の方が集える場所になりつつある。今年度は、西中歴史博物館を開館し、生徒は、博物館から借りてきた実物を見て、さいたま市への郷土愛がさらに深まっていた。来年度は、地域の会合の場、地域の方を講師としたセミナー、書道展や美術展などの生徒の作品を地域の方に見ていただく場等の企画を考えている。 ○今年度、PTA の組織改定や行事の精選等の改革も本格的に進み、中学校に早くなじんでもらうために、生徒や PTA の発案で、中学校区３校の６年生を集めて、「逃走中」のイベントを３月に予定し、中１ギャップの解消に役立てる。 ○来年度も学校 HP に、与野西中レポートとして、校長としてお知らせしたいこと、感じたこと、生徒の頑張っている様子を発信し、保護者や地域の学校への理解を高める。	安全教育について、地域と協働して取り組もうとする姿勢が明確に示されている。防災訓練や見守り活動等において、地域住民との連携が図られ、学校単独ではなく「地域ぐるみで子どもを守る」という意識の醸成が進んでいる点は評価できる。 また、地域の方と生徒が直接関わる機会を意図的に設けようとする方向性は、「開かれた学校」づくりの観点から重要である。
4	**『教育環境の整備に関する取組』** 〈現状〉 ○ここ数年、生徒主体の安全教育に重点を置き、生徒が常に安全な生活のための様々な活動に取り組んでいるため、災害や危険行為や危険場所に対する意識が高まっている。 〈課題〉 ○教職員による施設設備の安全点検を確実に行うだけでなく、生徒が自ら危険を予測したり、回避したりする力をさらに育んでいく。	・安全な生活の実現に主体的に取り組む生徒の育成に向けた生徒会の活動や、学校行事の充実	・安心・安全な生活を自ら築く主体的な生徒の育成のため、 ① 全教職員による安全点検を確実に実施し、迅速な修繕と危険個所等への対応を確実に見届ける。 ② 生徒が充実した学校生活を送るために、校長マネジメント経費を活用し、全教職員の意見を聞きながら執行について立案している。特にオンライン配信、生中継の機材設備に投資し、GIGA スクール構想のための環境整備に重点化する。 ③ 施設に関し、学校生活で不便なところを生徒に上の電子目安箱等を使いで洗い出し、クラスや全体で話し合いを重ねることで生徒目線の改善を図っていく。要望に対し、予算だてをしていく。建設的な提案で生徒達が学校を変えられることを実感させ、自己指導能力の育成を図る。 ④ SNS 上の個人情報漏洩や誹謗中傷等の未然防止を生徒会役員や学級委員を中心に、生徒自らの手で行い、生徒会朝礼での呼びかけや、SNS 使用上の宣言を関係小学校児童会と一緒に策定する。	○学校評価生徒アンケート「環境が整った学校である」について肯定的な意見が 95%以上、A 評価 60%以上になる。 ○学校評価保護者アンケート「自然災害等緊急時の対応を適切に行い、生徒の安全確保に努めている」の項目に対し、83%の肯定的な回答、A 評価 28%以上になる。	○生徒アンケート「環境が整った学校である」に対し、98%が肯定的な回答、A 評価 65%以上になった。また保護者アンケート「自然災害等緊急時の対応を適切に行い、生徒の安全確保に努めている」の項目は、86%が肯定的な回答、A 評価 32%となった。これは、全職員による安全点検を確実に実施し、迅速な修繕と危険箇所等への対応を確実に見届けたことと、生徒主体の学校環境整備を行うよう、生徒会本部自らが取り組んだ結果である。 ○生徒会本部では、今年から新たに、アナログとデジタルの両方で、「実現ボックス」を設置し、生徒目線での生活改善への意見の収集、改善に向けての取組状況、着実に実践できた。トイレの備品増、清掃用具の充実をはじめ、クリスマスイルミネーション設置、ロビースペースの憩いの森計画等、生徒の要望を実現していった。	B	○来年度は、生徒会朝礼を多く設定し、生徒自ら学校生活上の課題や課題解決を図り、共有する場とする。いじめ撲滅や SNS 使用上注意喚起する呼びかけを行い、いじめ NO や SNS の宣言を出すなど、安心して生活できる環境づくりを行う。 ○リフレッシュ工事が昨年度終わり、今年度、校舎をきれいなまま維持していくための方策を、生徒委員会を活用し、生徒主体で考えさせた。来年度は、整美委員会を中心にきれいなまま学校を維持するための清掃重点プロジェクト、ロビースペースに生徒の作品を展示したり、生徒の心の安らぎとなるような活用を生徒と考え、環境整備していく。特に、全員が通る １ 階廊下の掲示物を工夫を凝らし、明るく元気の出る校舎内環境を演出する。校長マネジメント経費を使い、必要な環境設備投資を行っていく。	生徒会朝会を設置し、生徒自らが学校生活の課題を共有・発信する場を確保したことは、教育環境の整備において大きな意義がある。 特に、いじめや SNS 上の誹謗中傷をなくす取組を生徒会が主体となって推進している点は、「自分たちの学校は自分たちでより良くする」という自治意識の醸成につながっている。 また、環境整備を委員会活動に位置づけ、継続的な取組としていることは評価できる。
5	**『教職員の資質向上に関する取組』** **『働き方改革についての取組』** 〈現状〉 ○新たな学びのスタイルの中心となる、情報端末をはじめとしたＩＣＴの活用方法について、エヴァンジェリストが中心となり研修を重ねてきた。 ○アクティブ・ラーニング型授業の実施について、定着が図られつつある。 〈課題〉 ○ＩＣＴの活用について、教員間で取組の差が見られる。教職員全員が、授業で効果的にＩＣＴ活用が図れるよう、研修が必要である。 ○多様な学習場面（家庭学習、オンライン学習）・学習形態（個別学習、探求型学習）・指導目標（基礎基本の定着、学び続ける力の育成）とＩＣＴの活用について効果的な関連性が教職員の中で定まっていない。	・教職員一人ひとりが働きがいを持ち、キャリアアップできる環境整備 ・生徒とともに教職員も自己実現が図れる職	・学校全体で組織的に、教職員の授業内容やＩＣＴの活用能力のスキルの向上に取り組む。 ①教員の授業の質の向上のため、毎日の教室訪問や年２回全教員の授業参観（教職員同士見合う授業）を実施する。「学びの指標」のチェック項目に照らし合わせ、タブレットの効果的な活用や学び合いの視点を重視した指導・助言をその後面談で行う。 ②当初面談で、キャリアパスポートに基づいたスキルを明確化し、全教職員の自己評価シートにスキルアップ・キャリアアップ項目を明記させ、年３回の人事評価面談で、達成状況や進捗状況を確認する。 ③全教職員が、校内研修や校内有志勉強会（与野西 ICT カフェ等）で、Teams の課題配信をはじめ、スタディーサプリの紐づけ、Kahoot!や Quizlet、Canva 等が活用できるよう、エバンジェリストを中心に教え合い学び合いを行う。 ④業務改善のため、三者面談の予約に Microsoft Booking を活用したり、今年度より学プリを導入し、日々の欠席連絡、学校だより、学年だより等のデジタル配信を行う。 ⑤教職員の働き方のメリハリをつけるために、勤務時間内に、会議や生徒指導等、組織で行う仕事を終了させる。計画年休を積極的に奨励し、教職員も多様な経験を積み生徒に還元できるようにする。全教職員が勤務時間外４５時間以内になるよう、自分自身の仕事の見通しやマネジメントに責任を持つ。	○2学期の学びの指標のアンケートの全教員の平均値を、1学期に比べ 0.2 ポイント上昇させる。（昨年度の１学期 3.29 ポイント） ○教職員アンケート「キャリアアップが図れ、生徒に還元できた」の項目に対し肯定的回答が、９７%を超える。（昨年度９５%）	○今年度２学期に実施した、学びの指標アンケートの全教員の平均値は 3.33 ポイントであり、1 学期 3.23 ポイントより 0.1 ポイント上昇した。このことは、毎日の教室訪問や２回実施した全教員への授業参観時に指導・助言を行ったこと、達成面談等で、「学びの指標」のチェック項目に照らし合わせ、タブレットの効果的な活用や学び合いの視点を重視した自己診断を行わせたことにより少しずつ授業改善がなされた結果だと考える。 ○教職員アンケート「キャリアアップが図れ、生徒に還元できた」の項目に対し肯定的な回答は、98%であった。当初面談で、キャリアパスポートに基づいたスキルを明確化し、全教職員の自己評価シートにスキルやキャリアアップ項目を明記させ、年３回の人事評価面談で、達成状況や進捗状況を確認した。 ○業務改善では、かける時間に対しての生徒への効果を教頭と絶えず検証し、教職員には仕事の優先順位と時間の見通しを持った仕事の遂行を常に意識させた。スクリレの導入で、配布資料の削減や職員の人事面談や保護者や生徒との三者面談の面談予約のオンライン化を行った。	B	○来年度、教職員の教育スキルの向上のため、校内研修だけでなく校内有志勉強会を実施し、デジタル採点や AI を活用した報告書作成、小テスト作成をはじめとする教材づくりなど、多くの教職員のさらなるスキルが向上を促し、業務に反映させていく。 ○引き続き、「教職員も自己実現を図れる学校」を第一優先事項とし、日々教職員の動きを注視している。特に、教職員の働き方のメリハリをつけるために、勤務時間内に、会議や生徒指導等、組織で行う仕事を終了させる。どうしても、いじめや命にかかわる案件の際は、管理職に説明し、適切で必要な人数で事に当たる。生み出した時間で教職員には、自己実現を図る取組を促す。達成面談の際に全員の今年度成し遂げたいことを確認し、教職員は、その取組過程で、わかった・出来た時の嬉しさや努力の方法などを実体験として生徒に伝えるようにする。	働き方改革を学校経営の重要課題として位置づけ、業務の見直しや会議の精選等に取り組んでいる点は評価できる。 また、校内有志による勉強会を設置し、自主的に学び合う文化を醸成していることは、教職員の資質向上につながる意欲的な取組である。 教職員が専門性を高めながら、やりがいや自己実現を感じられる学校づくりを目指している姿勢は、組織の活性化に資するものである。